

アタッチメントスタイルによるカウンセリングニーズの違い

塚越菜緒子（東京大学大学院教育学研究科）

A study about the relationship of the expectations for counseling
and attachment styles

Naoko Tsukakoshi

Author's Note

Naoko Tsukakoshi is a PhD student, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

Attachment styles are focused as key factors of psychological counseling process in recent decades. About help-seeking intentions, the relationships between attachment avoidance and avoidance of help-seeking, and between attachment anxiety and excessive help-seeking have been showed in previous studies. In this study, a survey was conducted not only to college students but to people in early adulthood, so that more factors were investigated which could affect their expectations for counseling other than attachment styles. The multiple logistic regression was used to analyze the data, and the result showed that attachment anxiety was the only factor which was significantly related to the hope to get counseling. The differences of their themes of worry and the reasons of hesitation in getting counseling were also studied. People categorized fearful-avoidant picked more themes of worry than people categorized secure, and people categorized dismissing tended to show more doubt about the reliability of counselors than people categorized preoccupied. Therefore, it was concluded that attachment styles were related to their expectations for counseling, and they were useful concepts to recognize the characters of potential clients.

Keywords: attachment styles, counseling, early adulthood

キーワード：アタッチメントスタイル，カウンセリング，成人期前期

アタッチメントスタイルによるカウンセリングニーズの違い

1 問題と目的

近年, Bowlby (1982) によるアタッチメント理論をカウンセリング実践に繋げる研究が注目され, 多くの報告がなされている。

しかし社会全体を見ると, 苦痛を抱えながらもカウンセリング利用に踏み切れない人も多数いると考えられる。潜在的なニーズを抱えた人々をいかに適切な支援に繋ぐかは重要な課題であり, 例えば学生相談機関などにおいて模索が続けられている(中村, 2021; 西山ら, 2005; 高野ら, 2006)。カウンセリングが他者を頼り援助を求める場であることを踏まえると, カウンセリングの場にまだ現れていない人々を理解する上でもアタッチメント理論は有用な示唆をもたらす可能性がある。

アタッチメントと援助要請に関しては, アタッチメント関係に回避的な人は対象と距離において自力で解決しようとする脱活性化方略を, アタッチメント関係に不安の強い人は苦痛を過剰に表出してサポートを得ようとする過活性化方略を採用するとされる(Shaver & Mikulincer, 2002)。また多くの実証研究において, 安定したアタッチメントと適切な援助希求の関連が示されている(Rholes & Simpson, 2004 遠藤他監訳, 2008)。日本でも援助希求や被援助に関する研究が行われており, 総じて安定したアタッチメントは適切な援助希求へと繋がり, 見捨てられ不安に関しては抑制と促進の両方への影響を示した研究もあるが(永井, 2017)概ね援助を求める方向へ, 親密性の回避は被援助を避ける方向へと影響することが示唆されている(馬場, 2015; 永井・桑原, 2017)。

カウンセラーへの援助要請に関しては

Shaffer et al. (2006) による研究があり, アタッチメント回避は低い利益と高いリスク予期, 援助要請への否定的態度に媒介され, カウンセリングを求める意思の低さへと繋がるのが明らかにされている。一方, アタッチメント不安は, 高い利益とリスク予期, 援助要請への肯定的態度に媒介され, カウンセリングを求める意思の高さへと繋がるのが示されている。また陳・松本(2020)は在日中国人留学生に同様の調査を行い, 援助要請の対象として家族, 中国人友人, 日本人友人, 教師, カウンセラーを設定し, 比較している。陳・松本(2020)によれば, 全対象において親密性の回避は利益予期に媒介され援助要請意図に負の影響を与えるが, 中国人友人では回避が援助要請意図に直接負の影響を与える一方, 教師とカウンセラーでは見捨てられ不安が直接負の影響を与えるという違いが見られた。以上より, 回避はカウンセラーの利用にもネガティブに働くと考えられるが, 不安に関しては知見が一貫せず, 環境, 文化差, カウンセリングの利用しやすさなど他の要因に影響される可能性があるのだろう。

ただし上記先行研究の多くは大学生を対象としたものであった。より広い年齢層の人々が, 多くは大学のような信頼できる機関による“お墨付き”のない有料のカウンセリングを利用しようとする場合, 異なる関連性が見られることも考えられる。対象年齢を広げるにあたっては, 家族や職業など, 多様なデモグラフィック変数の影響も考慮が必要であろう。

そこで本調査は, 潜在的なニーズを持つ人々に関するより一般的な示唆を得ることを目的とし, 成人期前期を対象にアタッチメントスタ

イルとカウンセリングに対するニーズの関連について検討を行うものである。またカウンセリングに繋げる適切なアプローチ法や、面接初期の工夫について示唆を得るため、カウンセリングで相談したい内容、およびカウンセリングを利用していない理由についても併せて調査する。その際、パーソナリティの全体像をイメージしやすいという実践的意義から、アタッチメントスタイルを4分類して分析を行う。

先行研究から予測される仮説は以下のとおりである。援助希求戦略の違いは年齢層を広げても変わらないと考えられ、カウンセリングを受けてみたいと思う人は親密性の回避が低く（仮説①）、見捨てられ不安が高い（仮説②）。またカウンセリングを受ける希望があり、かつ見捨てられ不安の高い人（とらわれ型・恐れ型）は過活性化方略により幅広い悩みを示し（仮説③）、アタッチメントが不安定な人（軽視型・とらわれ型・恐れ型）はカウンセラーの信頼性への不安から利用を躊躇する（仮説④）。その他、探索的に検討を行う。

2 方法

2.1 調査参加者

成人期前期にあたる18歳から40歳までの男女であった。調査協力に同意し、回答に欠損のない262名（男性88名、女性174名、平均年齢33.03歳、 $SD=5.39$ ）を分析の対象とした。

2.2 調査内容

アタッチメントスタイル尺度 一般他者を想定した愛着スタイル尺度（ECR-GO；中尾・加藤，2004）を使用した。この尺度は見捨てられ不安（18項目）、親密性の回避（12項目）の計30項目からなり、評定は7件法（1＝“全く当て

はまらない”から7＝“非常によく当てはまる”）を用いた。

カウンセリング希望の有無 “カウンセリングを受けてみたいと思うときはありますか”という1項目に対し、“はい”か“いいえ”を選択するよう求めた。

カウンセリングで相談したい内容 予備調査に基づき、以下の9項目を選択肢として提示し、該当するものをすべて選択するよう求めた。①仕事や学業上のパフォーマンスに関する悩み、②人間関係（家族や交際相手など、心理的に近い相手との関係性）、③人間関係（知人や同僚など、より一般的な関係性）、④自分の性格、⑤将来や今後の生き方、⑥過去の経験、⑦身体的な健康状態、⑧性や性別に関する悩み、⑨その他。

カウンセリングを利用していない理由 予備調査に基づき、以下の7項目を選択肢として提示し、該当するものをすべて選択するよう求めた。①カウンセリングに行く日時の確保が難しい、②費用面への懸念（料金が安い、最終的にいくらかかるのか分からないなど）、③予約や申込が必要で、困っているときにすぐ利用できない、④どこで受けられるのかよく分からない、探し方が分からない、⑤カウンセラーが信用できるか不安がある、⑥まだそれほど状況が切迫していない、自分で解決できるかもしれないと思っている、⑦その他。

2.3 手続きと倫理的配慮

クラウドワークスを利用してオンライン質問紙調査を実施した。倫理的配慮として、著者の作成した入力フォームの冒頭に、調査の趣旨、自由意思による調査参加と中断の自由、回答内容は研究目的以外には用いられないこと、データは直ちに符号化され個人が特定されない形に

処理されること、データはパスワードをかけて厳重に保管されることを明記し、入力完了とデータ送信をもって研究への同意とした。また本研究は筆者の所属する東京大学ライフサイエンス研究倫理支援室の許可を得た。

2.4 分析方法

カウンセリング希望の有無に関連する要因を検討するため、まず年齢とアタッチメントスタイル尺度について、t 検定もしくは Mann-Whitney の U 検定を行った。各変数間の相関係数、および尺度について Cronbach の α 係数も算出した。次に性別、職業、婚姻状況、同居家族、同居する子どもの有無について、クロス集計表を作成し、独立性の χ^2 乗検定を行った。続いて各要因による影響を検討するため、カウンセリング希望の有無を従属変数とし、先行研究に基づく理論的仮説、t 検定もしくは Mann-Whitney の U 検定にて有意差を認めた要因、 χ^2 乗検定にて有意差を認めた要因から独立変数を選択し、強制投入法による多重ロジスティック回帰分析を行った。

またアタッチメントスタイルによる、カウンセリングで相談したい内容、まだ利用していない理由の違いを検討するため、まず調査参加者全体の見捨てられ不安得点と親密性の回避得点の平均値を算出し、平均値よりも高い群と低い群に分け、それぞれを組み合わせ、安定型（見捨てられ不安低×親密性の回避低）、軽視型（見捨てられ不安低×親密性の回避高）、とらわれ型（見捨てられ不安高×親密性の回避低）、恐れ型（見捨てられ不安高×親密性の回避高）の4分類とした。次に4つのアタッチメントスタイルと各質問項目のクロス集計表を作成し、独立性の χ^2 乗検定を行った。有意差の認められ

た項目では調整済み残差係数を算出し、割合の高い、もしくは割合の低いアタッチメントスタイルを検討した。なお相談したい内容について、⑧性や性別に関する悩み、⑨その他の2項目は選択者が少数であったため分析から除外した。また利用していない理由について、③すぐ利用できない、⑦その他は選択者が少数であったため分析から除外した。

統計パッケージは SPSS Statistics Ver.29 を使用し、有意水準は5%とした。

3 結果

カウンセリング希望の有無による、アタッチメントスタイル尺度得点、年齢の平均値の比較結果を Table 1 に示した。年齢に有意差は見られなかった ($U=8062.00$, $p=.464$)。アタッチメントスタイル尺度については、見捨てられ不安はカウンセリング希望のある群の方が有意に高かったが ($t=4.12$, $p<.001$)、親密性の回避は有意差が見られなかった ($t=.62$, $p=.537$)。

Table 1 カウンセリング希望の有無による、アタッチメントスタイル尺度得点、年齢の平均値の比較

	希望あり (N=143)		希望なし (N=119)		t※	p
	M	SD	M	SD		
年齢	32.80	5.48	33.32	5.28	8062.00	.464
見捨てられ不安	66.22	16.83	57.42	17.70	4.12	<.001
親密性の回避	55.76	10.31	54.95	10.75	.62	.537

※年齢のみ Mann-Whitney の U 検定

各変数の相関係数と内的整合性 結果を Table 2 に示した。年齢、見捨てられ不安、親密性の回避に有意な相関は見られなかった。各尺度について Cronbach の α 係数を算出し、見捨てられ不安 ($\alpha=.91$)、親密性の回避 ($\alpha=.81$)

ともに十分な内的一貫性が示された。

Table 2 年齢, アタッチメントスタイル尺度の相関係数と内的整合性

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α	①	②
①年齢	33.03	5.39			
②見捨てられ不安	62.23	17.75	.91	-.005	
③親密性の回避	55.39	10.50	.81	.023	.022

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

カウンセリング希望の有無による, 性別, 職業, 婚姻状況, 同居家族, 同居する子どもの有無の比較 結果を Table 3 に示した。カウンセリングを希望する群は希望しない群に比べ, 女性の割合が高く ($\chi^2 = 8.40$, $p = .004$), 学業や職業に現在従事していない人の割合が高かった ($\chi^2 = 4.67$, $p = .031$)。

Table 3 カウンセリング希望の有無による, 性別, 職業, 婚姻状況, 同居家族, 同居する子どもの有無のクロス集計表

	希望あり (<i>N</i> = 143)		希望なし (<i>N</i> = 119)		χ^2	<i>p</i>
	<i>N</i>	%	<i>N</i>	%		
	性別					
男性	37	25.9	51	42.9		
女性	106	74.1	68	57.1		
職業					4.67	.031
有職 (学生含む)	100	69.9	97	81.5		
無職	43	30.1	22	18.5		
婚姻状況					2.97	.085
既婚	68	47.6	44	37.0		
独身	75	52.4	75	63.0		
同居家族					3.42	.181
一人暮らし	24	16.8	24	20.2		
親、きょうだい	45	31.5	47	39.5		
配偶者/パートナー と子ども	74	51.7	48	40.3		
同居する子どもの有無					3.76	.053
子どもあり	52	36.4	30	25.2		
子どもなし	91	63.6	89	74.8		

カウンセリング希望の有無を従属変数とした多重ロジスティック回帰分析 先行研究からの示唆, 本調査での有意差の検討を踏まえ, 性別, 職業状態, 見捨てられ不安尺度得点, 親密性の回避尺度得点の4項目を独立変数として, 強制投入法による多重ロジスティック回帰分析を行った。結果を Table 4 に示した。カウンセリング希望の有無に関連する要因として, 見捨てられ不安尺度得点のみが有意となり (OR 1.027 (95% CI: 1.012-1.043), $p < .001$), 見捨てられ不安の高い人ほどカウンセリングを希望する人が多かった。

4分類アタッチメントスタイル別, カウンセリングで相談したい内容の比較 結果を Table 5 に示した。有意差が見られたのは④自分の性格 ($\chi^2 = 11.25$, $p = .010$), ⑥過去の経験 ($\chi^2 = 15.87$, $p = .001$) であった。④自分の性格を選んだ人の割合は恐れ型において高く, 安定型において低かった。同様に, ⑥過去の経験を選んだ人の割合も恐れ型において高く, 安定型において低かった。

4分類アタッチメントスタイル別, カウンセリングを利用していない理由の比較 結果を Table 6 に示した。有意差が認められたのは⑤カウンセラーの信頼性への不安のみであり ($\chi^2 = 10.53$, $p = .015$), 選択した人の割合は軽視型において高く, とらわれ型において低かった。

4 考察

本研究の目的は, 先行研究よりも年齢層を広げて成人期前期を対象とし, カウンセリングに対する潜在的なニーズとアタッチメントの関連を明らかにすることであった。本研究の結果,

カウンセリング希望の有無には見捨てられ不安のみが関連を示し、見捨てられ不安の高い人ほどカウンセリング希望者が多かった。また相談したい内容については“自分の性格”と“過去の経験”の2項目にて安定型よりも恐れ型の方が選択する人の割合が高く、利用していない理由については“カウンセラーの信頼性への不安”のみ軽視型の方がとらわれ型より選択する人の割合が高かった。

カウンセリング希望の有無と親密性の回避には関連が示されず、仮説①は支持されなかった。大学生より上の年代を含めると、親密性の回避の高さは相談への抑制には繋がらないようである。ただし、カウンセリングに何を求めているかという質的な違いについては検討の余地があると思われる。坂中（2005）は、一般のカウンセリング理解として、カウンセラーから指示をもらって症状が改善するイメージがあることを指摘している。相互理解や深い自己開示を必要としないガイダンスのようなものを求めているのであれば、アタッチメントに回避的な人であっても抵抗は生じにくいであろう。年齢を重ねて社会経験が増えるにつれ、業務などにおいて、自分が必要とする情報を持つ相手を見つけて相談するスキルが身についていく側面もあるかもしれない。

カウンセリングを受けたいと思う人は見捨てられ不安が高いという仮説②は支持された。先行研究では見捨てられ不安が援助要請を抑制する傾向も示されていたが、本調査の結果は、媒介要因を含めていないため同一と見なすのは難しいものの Shaffer et al. (2006) と同様に促進的な影響を示唆するものであった。就職、結婚、出産といった大きな環境変化が生じやすい年代であっても、そうした外的要因よりもアタッチ

メント不安の高さがカウンセリングへの期待を規定するようである。

相談したい内容に関しては、2項目について安定型よりも恐れ型で多く選択されており、仮説③は部分的に支持されたと言える。恐れ型は4つのスタイルの中で最も不適応とされ (Simpson & Rholes, 2002)、カウンセリングを必要とするような悩みを抱えやすいと考えられる。ただし選択率の高さは全9項目中2項目にとどまり、さらにとらわれ型は他のスタイルと違いが見られなかった。要因として、本調査は選択肢を提示したため、普段は本人に強く意識されていない内容まで選ばれやすかった可能性がある。自由記述式や、悩みの深刻さも測定するなど、実施上の工夫をした上で再検討が望まれる。

利用に至っていない理由については、軽視型がとらわれ型よりも“カウンセラーの信頼性への不安”を選ぶ率が高かったが、安定型と他のスタイルに差は見られず、仮説④は支持されなかった。軽視型は否定的な他者観、とらわれ型は肯定的な他者観を特徴としており、カウンセラーに対しても同様の姿勢を示すと考えられる。ただし他者への警戒心は、適度であれば健全な自他境界の表れとも言えよう。安定型と軽視型は選択率には差が見られなかったが、不安の質が異なる可能性は否めない。

本研究の限界として、まず回答内容の質的な差について十分な検討がなされなかった点が挙げられる。上述の通り、例えば同じ“カウンセラーの信頼性への不安”であっても、どのようなことに関してどの程度不安があるのかはアタッチメントスタイルにより異なる可能性がある。調査方法を工夫し、さらに検討する必要があるであろう。また回答者の属性について、本

Table 4 カウンセリング希望の有無を従属変数とした多重ロジスティック回帰分析

		B	オッズ比	95%信頼区間	p
性別（基準：男性）	女性ダミー	.553	1.738	.994-3.037	.052
職業（基準：有職）	無職ダミー	.353	1.423	.762-.2657	.268
見捨てられ不安尺度得点		.027	1.027	1.012-1.043	<.001
親密性の回避尺度得点		.007	1.007	.983-1.033	.555
定数		-2.346	.096		.007
モデル χ^2 検定	$p < .001$				
Hosmer-Lemeshow検定	$p = .625$				
判別の中率	63.4%				

Table 5 4 分類アタッチメントスタイル別、カウンセリングで相談したい内容のクロス集計表

	安定型	軽視型	とらわれ型	恐れ型	χ^2	p
①仕事や学業					7.52	.057
該当	12 (42.9%)	4 (13.3%)b	11 (26.2%)	16 (37.2%)		
該当なし	16 (57.1%)	26 (86.7%)	31 (73.8%)	27 (62.8%)		
②人間関係（親密な相手）					2.58	.462
該当	9 (32.1%)	15 (50.0%)	15 (35.7%)	19 (44.2%)		
該当なし	19 (67.9%)	15 (50.0%)	27 (64.3%)	24 (55.8%)		
③人間関係（一般的）					3.87	.276
該当	5 (17.9%)	4 (13.3%)	12 (28.6%)	13 (30.2%)		
該当なし	23 (82.1%)	26 (86.7%)	30 (71.4%)	30 (69.8%)		
④自分の性格					11.25	.010
該当	7 (25.0%)b	15 (50.0%)	23 (54.8%)	28 (65.1%)a		
該当なし	21 (75.0%)	15 (50.0%)	19 (45.2%)	15 (34.9%)		
⑤将来や今後の生き方					7.43	.059
該当	11 (39.3%)	16 (53.3%)	20 (47.6%)	30 (69.8%)		
該当なし	17 (60.7%)	14 (46.7%)	22 (52.4%)	13 (30.2%)		
⑥過去の実験					15.87	.001
該当	1 (3.6%)b	10 (33.3%)	5 (11.9%)	16 (37.2%)a		
該当なし	27 (96.4%)	20 (66.7%)	37 (88.1%)	27 (62.8%)		
⑦身体的な健康状態					1.67	.644
該当	5 (17.9%)	5 (16.7%)	9 (21.4%)	12 (27.9%)		
該当なし	23 (82.1%)	25 (83.3%)	33 (78.6%)	31 (72.1%)		
N	28	30	42	43		

※数値は各項目について該当すると答えた人数（割合）

※a:調整済み残差係数 > 1.96, b:調整済み残差係数 < 1.96

調査が対象とした年齢のうち後半（30代）が多いという偏りが見られた。参加者を増やした検討が望まれる。さらに坂本・千島（2018）はスクールカウンセリングの普及につれカウンセリング・イメージが肯定的に変化したことを指摘しており、本研究の対象者はまさに過渡期にあ

たる世代であった。わずかな年齢の差や出身校によってカウンセリングの身近さが異なり、利用意思に影響した可能性もある。

以上のような限界はありながらも、成人前期においても潜在的なカウンセリングへのニーズとアタッチメントの関連が示されたことは、

Table 6 4 分類アタッチメントスタイル別, カウンセリングを利用していない理由のクロス集計表

	安定型	軽視型	とらわれ型	恐れ型	χ^2	p
①日時の確保					.31	.958
該当	6 (21.4%)	5 (16.7%)	9 (21.4%)	9 (20.9%)		
該当なし	22 (78.6%)	25 (83.3%)	33 (78.6%)	34 (79.1%)		
②費用への懸念					6.19	.103
該当	12 (42.9%)	20 (66.7%)	21 (50.0%)	29 (67.4%)		
該当なし	16 (57.1%)	10 (33.3%)	21 (50.0%)	14 (32.6%)		
④どこで受けられるのか					5.92	.116
該当	5 (17.9%)	13 (43.3%)	15 (35.7%)	19 (44.2%)		
該当なし	23 (82.1%)	17 (56.7%)	27 (64.3%)	24 (55.8%)		
⑤カウンセラーの信頼性					10.53	.015
該当	9 (32.1%)	16 (53.3%)a	8 (19.0%)b	19 (44.2%)		
該当なし	19 (67.9%)	14 (46.7%)	34 (81.0%)	24 (55.8%)		
⑥まだそれほどではない					6.66	.084
該当	16 (57.1%)	17 (56.7%)	23 (54.8%)	14 (32.6%)		
該当なし	12 (42.9%)	13 (43.3%)	19 (45.2%)	29 (67.4%)		
<i>N</i>	28	30	42	43		

※数値は各項目について該当すると答えた人数（割合）

※a:調整済み残差係数>1.96, b:調整済み残差係数<1.96

具体的な介入を検討していく上で有意義な示唆と考えられる。

今後の展望としては、他の年齢層についても調査を行い、比較できると良いであろう。本調査ではデモグラフィック変数を含めてもアタッチメント不安のみがカウンセリングを受けたいとの希望に影響を示した。同様の傾向が他の年代でも見られるとすれば、アタッチメントの重要性の更なる認識に繋がると考えられる。また本調査はカウンセリングを受けたいかという意思を尋ねるものであったが、実際の利用との間には乖離があると思われる。実際に利用に至った人、至らなかった人についても検討し、その要因を明らかにすることで、カウンセリングを必要とする人への情報提供やアプローチに関する示唆が得られると考えられる。

引用文献

馬場康宏 (2015). 青年期の愛着スタイルと被

援助志向性 東京成徳短期大学紀要, 48, 47-54.

Bowlby, J. (1982). *Attachment and Loss*. Vol.1(2nd ed.). *Attachment*. New York: Basic Books.

陳佳怡・松本真理子 (2020). 在日中国人留学生における愛着が援助要請の利益とコストの予期および援助要請意図に与える影響 学校メンタルヘルス, 23(2), 213-221.

永井智 (2017). 援助要請スタイルと愛着および適切な援助要請行動の関連の検討 立正大学心理学研究所紀要, 15, 25-31.

永井智・桑原千明 (2017). 愛着が大学生の友人に対する援助要請意図に与える影響の検討 学校メンタルヘルス, 20(1), 58-67.

中村美穂 (2021). 学生相談室の利用しやすさを促進する情報提供についての検討 長崎国際大学論叢, 21, 17-27.

中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性

- の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 西山修・谷口敏代・樂木章子・津川美智子・小西寛子 (2005). 学生相談室の利用促進に向けた取り組みとその効果の検討—学生のニーズと認知度を中心に— 岡山県立大学短期大学部研究紀要, 12, 87-96.
- Rholes, W. S., & Simpson, J. A. (Eds.) (2004). *Adult attachment : Theory, research, and clinical implications*. New York: Guilford Press. (ロールズ, W.S.・シンプソン, J.A. 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志 (監訳) (2008). 成人のアタッチメント—理論・研究・臨床— 北大路書房)
- 坂本憲治・千島雄太 (2018). カウンセリング・イメージの経年変化—教職課程の大学生を対象として— カウンセリング研究, 51 (1), 27-38.
- 坂中正義 (2005). カウンセリングはどのように理解されているか?—心理臨床家との比較から— 福岡教育大学紀要, 54 (4), 123-131.
- Shaffer, P. A., Vogel, D. L., & Wei, M. (2006). The mediating roles of anticipated risks, anticipated benefits, and attitudes on the decision to seek professional help: An attachment perspective. *Journal of Counseling Psychology*, 53(4), 442-452.
- Shaver, P. R., & Mikulincer, M. (2002). Attachment-related psychodynamics. *Attachment & Human Development*, 4(2), 133-161.
- Simpson, J. A., & Rholes, W. S. (2002). Fearful-avoidance, disorganization, and multiple working models: Some directions for future theory and research. *Attachment & Human Development*, 4(2), 223-229.
- 高野明・吉武清實・池田忠義・佐藤静香・関谷佳代・仁平義明 (2006). 学生相談活動における情報提供のあり方についての検討—学生が求める情報についての質的分析から— 東北大学高等教育開発推進センター紀要, 1, 91-97.